

5月27日(日) 11:20~12:00 第一分科会:九州国立博物館ミュージアムホール

---

## 定慶様菩薩像の再検討

大阪大学 山口 隆介  
YAMAGUCHI Ryusuke

---

肥後定慶（1184～？）は、鎌倉彫刻様式を確立したとされる運慶、快慶らの次世代を担った仏師の一人である。出自は不明ながら、比較的多くの作品が知られ、なかでも、貞応3年（1224）の大報恩寺准胝觀音菩薩像と嘉祿2年（1226）の鞍馬寺聖觀音菩薩像は、その代表作として高く評価されている。両菩薩像は、装飾的な髪や頭髪、複雑な着衣の形式に独自性が顕著で、かつては宋代美術を積極的に摂取したものと解されてきた。しかし、水野敬三郎、深山孝彰の両氏によつて、むしろ運慶作品や古典を学びつつ、そこに創意工夫を加えたものと見直されている。また、「定慶様（風）」と称される、定慶の菩薩像と類似した形式をそなえる一群の菩薩像が存在することから、定慶は同世代に属する湛慶と比べても、後代に一定の影響力をもつた仏師とみなされってきた。本発表は、定慶の菩薩像と、いわゆる定慶様菩薩像の成立について再検討を試みるものである。

まず、定慶自身の菩薩像の成立について問い合わせば、特徴的な形式のほとんどは、深山氏が詳論されたように、すでに定慶以前に用意されていたものである。ここで、さらに山本勉氏によつて承久元年（1219）頃の造立である可能性が示唆された神奈川・金剛寺觀音・勢至菩薩像の存在に着目すると、深山氏が古典との関連を示唆された頭髪の形式についても、直接的には定慶以前の鎌倉初期彫刻を範としたと考えることができる。すなわち、定慶の菩薩像は、運慶世代において試みられた新形式を積極的に採用したものであり、こうした既存の形式に独自の解釈を加えることで、より複雑で装飾的な表現に成功した点に、その特質が認められる。

次いで、定慶作品と定慶様菩薩像との影響関係を検討する。両者は、確かに一見して類似性が認められる。ところが、髪の側面観や衣褶表現などに示された定慶の独自性は、必ずしも継承されているとはいはず、両者の間には直接的な影響関係を想定しえない。さらに、先に挙げた金剛寺像の存在を踏まえれば、定慶様菩薩像の波及は、定慶作品を端緒とするとみるよりも、むしろそれ以前に成立していたものの展開として理解するべきだろう。

また、本発表では、定慶様菩薩像における宋代美術の受容のあり方についても考察する。脇侍をなす定慶様菩薩像の着衣形式には、一つの定型のあったことが窺える。しばしばその一方で波状の衣縁が採用されることに加え、両脇侍で意識的に変化をつけるやり方自体も、宋仏画の翻案ではないだろうか。定慶様の成立には、近年、運慶作品や古典の影響が重視してきた。しかし、こうした視点に立つならば、定慶様菩薩像を宋代美術の受容という文脈のなかで捉え直す必要があるようと思われる。

以上の考察の結果、定慶様菩薩像が必ずしも定慶の影響下に展開したものでないとすれば、ここに新たな問題が提起されることとなる。すなわち、以降の展開を方向付けたといつても過言でないこの様式は、いかなる理由で規範性をもちえたのであろうか。この問題についてもあわせて一試論を提示したい。